区別点についての従来の知見は、再考の余地があり、*A. kor.* を *A. jap.* の変種か、季節的変異型とするのが妥当ではないかと考えるが、この点については、更に朝鮮に分布する *A. kor.* について、同様な実験観察を試みた上で決定さるべきものと思う。〔京都衛生研〕

屋外における人糞の蠅相に関する一観察

堀 克重

Hori, K.: Observations on the fly-fauna
of isolated human feces

私は昭和23年の春から夏にかけて、横浜市鶴見において金網製のトラップを用いて屋外の人糞に集る蠅類の調査を行つた。観察を行つたのは4月下旬から7月中旬までの間の38日である。1. この間、トラップに捕獲された昆虫はニクバエ類5種 (*S. peregrina*, *S. melanura*, *S. similis*, *S. misera*, *S. albiceps*), キンバエ類6種 (*L. sericata*, *L. cuprina*, *L. caesar*, *L. illustris*, *L. papuensis*, *Hemipyrellia ligurriens*), クロバエ類3種 (*C. grahami*, *C. vomitoria*, *T. calliphoroides*), *Graphomyia maculata*, *Muscina stabulans*, ヒメクロバエ類2種 (*O. nigra*, *O. leucostoma*), *Fannia canicularis*, *F. scalaris*, *Anthomyia illocata*, 猩々蠅類2種 (*D. melanogaster*, *D. busckii*), *Scopeuma stercorarium*, *Stenodryomyza formosa* 及び同定未了の *Fannia*, *Scatops* 等の14属約27種の蠅類と *Tubifera tenax*, *Polistes* sp., 一種のヤガとカメムシの類等であつた。2. このトラップに捕殺された昆虫の総数は5074頭で、このうち *C. grahami* 最も多く43.2%を占め、次は *S. peregrina* 10.4%, *Muscina stabulans* 8.8%, *C. vomitoria* 6.6%, *L. sericata* 5.7%, *F. scalaris* 4.4%, *L. illustris* 4.1%, *S. similis* 2.2%の順に減少し、其の他の類は何れもごく少数にすぎなかつた。3. 蠅が公衆衛生の立場から極めて重要である大きな理由は、いうまでもなく蠅の糞食性に随伴する各種の病毒の傳播である。私が上に述べたように、一塊の人糞にも頗る多種多様の蠅類が蟄集するが、また人糞の蠅に対する誘引性には他の餌にはみられない特徴ともいふべきものがあつて、そのうち人糞の蠅に対する誘引性が極めて長いことゝ一たん乾燥してしまつた人糞も雨水等にぬれると誘引性を再び恢復すること等は重要であると思う。〔金沢大理学部〕

蠅と遠藤赤変菌に就て 小林和夫・大浦辰男

Kobayashi, K. & Oowura, T.: A Study on the
lactose fermenting bacilli isolated from flies

従来より蠅が消化器傳染病原菌を機械的に傳播する危険のある事が指摘されているが、筆者等は昭和27年6月下旬及び10月下旬に厨芥捨場で酒粕を用い硝子製蠅取瓶で可及的無菌的に捕集した蠅に就いて、体表に附着たし遠藤赤変菌の有無を検索した結果次のような成績を得た。尙遠藤赤変菌の分類には Parr の所謂 Invic System を採用した。1. 捕集し得た蠅の種類はイエバエ属、キンバエ族、ニクバエ属の3種類で、或る家庭の芥溜場ではイエバエ属のみ、研究室芥溜場ではキンバエ族、ニクバエ属の2種類、寮炊事場の芥溜場で、イエバエ属、キンバエ族、ニクバエ属の3種類であつた。2. 捕集した蠅と遠藤赤変菌検出率との関係は、或る家庭の芥溜場で捕集されたイエバエ属には、*E. coli* 型6.1%(6月), 5.7%(10月), *A. aerogenes* 型72.5%(6月), 72.0%(10月), *Intermediate* 型17.6%(6月), 17.2%(10月), *Anaerogenic* 型3.8%(6月), 5.1%(10月)で *A. aerogenes* 型が最も多かつたが、研究室芥溜場でのキンバエ族には、*E. coli* 型14.7%(6月), 13.7%(10月), *A. aerogenes* 型26.5%(6月), 26.3%(10月), *Intermediate* 型55.9%(6月), 55.8%(10月), *Anerogenic* 型2.9%(6月), 4.2%(10月)で、ニクバエ属に於いては *E. coli* 型23.2%(6月), 19.7%(10月), *A. aerogenes* 型52.2%(6月), 57.3%(10月), *Intermediate* 型18.8%(6月), 17.9%(10月), *Anaerogenic* 型5.8%(6月), 5.1%(10月)でキンバエ族には *Intermediate* 型が、ニクバエ属では *A. aerogenes* 型が最も多かつた。又寮炊事場芥溜場の蠅では、イエバエ属に *E. coli* 型20.0%(6月), 14.7%(10月), *A. aerogenes* 型27.5%(6月), 32.6%(10月), *Intermediate* 型48.3%(6月), 40.3%(10月), *Anaerogenic* 型4.2%(6月), 12.4%(10月), キンバエ族に *E. coli* 型22.8%(6月), 21.5%(10月), *A. aerogenes* 型1.9%(6月), 0.7%(10月), *Intermediate* 型73.4%(6月), 75.6%(10月), *Anaerogenic* 型1.9%(6月), 2.2%(10月), ニクバエ属には *E. coli* 型29.4%(6月), 26.8%(10月), *A. aerogenes* 型45.2%(6月), 47.1%(10月), *Intermediate* 型18.1%(6月), 18.5%(10月), *Anaerogenic* 型7.1%(6月), 7.6%(10月)でイエバエ属、キンバエ族には *Intermediate* 型が、ニクバエ

属には *A. aerogenes* 型が最も多かつた。3. *E. coli* 型を体表に附着する割合はニクバエ属、キンバエ族、イエバエ属の順に少く、何れも 6 月下旬のものの方が多かった。
〔熊本大衛生〕

熊本市の蠅

小林和夫・大浦辰男

Kobayashi, K. & Oowra, T.: Flies in the Kumamoto City

熊本市に於いて、昭和 27 年 1 月から同年 12 月迄の 1 年間、屋外では酒粕を誘餌とした蠅取瓶、屋内では蠅取りポンを用いて捕集した結果次の成績を得た。1) 捕集総数は 21,675 匹で、その内訳は屋外で総数 12,519 匹の中、イエバエ属 321 匹 (2.6%), オウイエバエ属 351 匹 (2.9%), ヒメイエバエ属 471 匹 (3.8%), ヒメクロバエ属 204 匹 (1.6%), クロバエ族 600 匹 (4.8%), キンバエ族 10,038 匹 (80.2%), ニクバエ属 526 匹 (4.1%) の 7 種類で、之等の中キンバエ族が圧倒的に多く、屋内では総数 9,156 匹の中、イエバエ属 8,700 匹 (95.0%), オウイエバエ属 142 匹 (1.6%), ヒメイエバエ属 184 匹 (2.0%), ヒメクロバエ属 7 匹 (0.1%), クロバエ族 66 匹 (0.7%), キンバエ族 57 匹 (0.6%), の 6 種類で、ニクバエ属は全く見られずイエバエ属が圧倒的に多い他は何れも屋外の場合よりも少い。2) 季節的消長は、屋外屋内何れも 6 月が最高で、盛夏に一時減少し、11 月に第 2 の小さい山を作るが、屋内のものでは、晩春から盛夏にかけての出現は屋外のそれより稍々先行する。各属では、屋外、屋内ともに、ヒメイエバエが 5 月及び 10 月クロバエが 5 月、11 月、屋外でのニクバエが 5 月から 8 月にかけての幅広い山と 11 月に山を示す他は何れも 6 月と 11 月に多く発生している。3. 捕集された蠅の雌雄の割合は屋外、屋内ともにイエバエのみ、雄が多く雌の約 2 倍を示すが、他のものは何れも雌が多く、雄の約 2 倍前後を示している。4. 同期間内の熊本市赤痢患者発生状況を蠅の消長と比較すると、患者発生は 8 月を頂点とする一山を示すが、蠅の発生は患者発生に 2 カ月程先行し、患者発生の減少する頃には蠅の発生も減少している事が知られた。
〔熊本大衛生〕

蠅幼虫に対する殺虫剤の効力について(予報)

鈴木 猛・佐藤孝慈・鈴木 昭

Suzuki, T., Sato, K., & Suzuki, A.: Effect of insecticides on fly larvae (Preliminary report)

蠅幼虫は殺虫剤に対する抵抗が甚だ強く、衛生害虫駆除における最大の隘路の一つとなつている。筆者らは各種ハエ幼虫に対するいろいろな殺虫剤の効力を検討し、その作用形態を比較し、更に有効な薬剤を探索する目的の下に現在実験を行いつゝある。今回はその基礎的研究として蠅幼虫に対する効力試験法及び、それを用いて二三の殺虫剤の効力を比較検討した結果を予報的に述べる。1. 効力試験法 従来ハエ幼虫に対する効力試験法としては、10 倍ないし 100 倍程度の低稀釈薬液中にハエ幼虫を浸し、数時間以内にその時間と死亡率の関係を求める試験法がしばしば行われた。この方法は実際の適用と著しく異り、且つ一面的な方法たるを免れない。筆者らは二つの方法を考案した。a. 浸漬法、10 倍ないし 1,000 倍の稀釈薬剤中にハエ幼虫 (*Sarcophaga peregrina*, *Aldrichina grahmi*, *Phaenicia sericata* etc.) を浸漬し、30 分後にとり出して、これを馬肉の通常飼育餌に放つ、以後原則として羽化するまで、生死を観察し、浸漬後 1 日、3 日、10 日の死亡数、蛹化数、羽化数を求める。b. 混和法、かりに混和法となづけた方法は、馬肉の通常飼育餌中に各種のハエ 1 齢或いは 2 齢幼虫 (時には卵) を入れ、引きつゞきそのまま飼育して同様羽化するまで観察する。2. 殺虫剤の効力 これらの試験法によつて二三の殺虫剤の効力を試験した結果、次のような知見を得た。a. BHC 及びリンデンは効力が大きい、DDT はかなり劣る。b. オルソデクロールベンゾールは高濃度では致死時間もはやく、比較的有効であるが低濃度になるに従つて効力激減する。c. 1 齢ないし 2 齢幼虫は DDT, BHC に対して比較的抵抗力が弱い。d. オルソデクロールベンゾールを主剤とする市販殺虫剤は効力にかなりの相違がある。e. DD, Ethylene dibromide, Trichloroethylene は相当に有効であつた。

〔傳研寄生虫〕

野兎病ダニの採集について

大原嘗一郎・佐藤充男・佐藤 併

Ohara, S., Sato, M. & Sato, T.: Collection and investigation of "Yatobyo"-ticks

昭和 27 年夏にダニの刺咬による野兎病 2 例を経験し